

弱さの倫理学

不完全な存在である私たちについて

宮坂 道夫(著)

慶大文学部名誉教授

山内 志朗

弱さは絶望ではなく希望である

著者は倫理を次のように宣言する。倫理とは、「弱い存在を前にした人間が、自らの振る舞いについて考えるもの」であると。

倫理学は正義とは何か、善とは何か、幸せとは何か、そういったことを考える学問だと考えられている。ただ、そういった問題設定は強い者目線での思考に染まりがちだ。強さは戦いを招き寄せる。だからこそ、世界的な宗教は、キリスト教も仏教も徹底的に弱者の地平から人間の救済を考えてきた。本質的に人間は弱く不完全であり、不完全なまま生き続けるものであるという事態を前にして、私たちは絶望に陥らず希望を語ることが求められている。

著者は、前著『対話と承認のケア』(医学書院、2020年)の中で、ケアというものが、対話において弱さが顕現することの過程と、弱さを承認し、その弱さに配慮し、世話していくことを語った。この弱さのお世話こそ、ケアの本質である。この流れは本書でも継承されており、弱さを巡る本質論として結実している。

自律、責任、理性といった、強い者のため倫理学が、倫理学の主流を占めてきた。その流れに対して、著者は静かでありながら断固としてあらがう。著者の姿は一貫している。

弱さとは、生きている存在だけが持つ強さの代償、脆さは高機能の代償であり、死や有限性は高度な統合性を獲得したことの代償であるという。代償ということ、これこそ本書の基調を成すものであり、弱さを正しく位置付け評価するための重要な基本命題になっている。弱さとは取り除かれるべき存在の側面であるのではなく、存在するこ

との必然的条件であり、それを喪失すること自体が人間であることをやめることなのである。

古い倫理学に代わって、20世紀の倫理学は、徳倫理学もケアの倫理も、不完全性や非存在をまなざしの中心に据えている。

死をできる限り遅くすることが医学の基本課題であるとする、倫理学は不死を理想状態とするものではない。死を忘却して、死なないことではなく、必ず死ぬという人間の避けがたい弱さを中心に据える視座こそ、弱さの倫理学のテーゼである。

人間は死の前には弱い存在だ。それは呪いではなく、祝福であり、そうでなければならない。

他者とのかかわりの中でも、人間は弱い存在であり、他者との絆に巻き込まれ、それを取り込む存在である以上、弱さを甘受し、内化することができなければ、共同存在ではいられない。弱さとは人間であることの本質的条件なのである。

強さを求め荒れ狂う世界の現状の中で、本書の放つ声は小さいようだが遠くまで響くものだと思う。私の心もまた共鳴した。



●A5/頁 248/2023 年
定価：2,420 円
(本体 2,200 円 + 税 10%)
[ISBN978-4-260-05114-9]
医学書院 刊